

JFK (Japan-Finland-Korea) 大学生比較調査について (2006年8月3日修正版)

2006年8月

木村忠正

小職が「JFK 大学生比較調査」と呼ぶ調査は、対人信頼感、社会的信頼感に関するデータについて、『NIRA 政策研究』（2005年12月、vol.18、no.12）に寄稿した拙稿（『間メディア性』本格化の年）もあり、各所で関心をもたれております。

たとえば、

- 第 164 回国会 参議院財政金融委員会（平成 18 年 3 月 16 日）峰崎直樹氏質問
<http://kokkai.ndl.go.jp/SENTAKU/sangiin/164/0060/16403160060007c.html>
- 第 164 回国会 教育基本法に関する特別委員会（平成 18 年 6 月 2 日）高井委員質問
http://www.shugiin.go.jp/itdb_kaigiroku.nsf/html/kaigiroku/015816420060602008.htm
- 2006 年 森 田 実 政 治 日 誌 [136] (2006.3.14)
<http://www.pluto.dti.ne.jp/~mor97512/C02515.HTML>
- 東京教組・コラム・信頼関係の危機（2006年3月）
<http://www4.ocn.ne.jp/~ttutokyo/seimei/coramusinrai060310.html>

など。

これに関連し、根拠となるデータについての質問がこれまで何件か寄せられてきました。とくに、質問文、「信頼」という日本語が、それに対応する韓国、フィンランド語とどのような関係にあるのか気に懸ける方が多いように思います。

言葉の問題はもちろん大変重要だと考えます。小職が文化人類学徒であれば、尚更のことです。ただ、小職にはまだ、韓国社会、フィンランド社会と比較して深い議論を展開できるだけの見識は、残念ながらありません。韓国、フィンランドそれぞれ4、5日程度ずつ4回ほど訪問し、家庭調査なども行いました（拙著『ネットワーク・リアリティ』参照）が、それはあくまで情報行動についての調査であり、「社会的信頼」「対人信頼感」の観点からの調査ではなかったからです。

後で述べる質問文の作り方からして、ハンデル、フィンランド語の質問文は、それぞれの言語のネイティブによるもので、彼らは、日本語の「信頼」や英語の「trust」にあたる現地語を使っていることは間違いありません。ただし、そもそも、「信頼」という言葉は、日本語でも大変難しい概念であり、現状は、日本社会における「信頼」について、どう研究を進めればよいか模索している状況です。

そこで、JFK 大学生比較調査について、その概要と、用いられた質問文を公開することにより、関心をもたれた皆さまの参考に供したいと思っております。この質問文を用いてさらに調査が行われたり、あるいは、語句の意味合いについて、より適切なものへと発展させていくことができれば大変嬉しく思います。

反面、他の社会との比較はさておき、図 1 のデータは、日本社会に関して反省的に考える機会を与えてくれているようには強く感じています。産業社会、消費社会として高度に発展した私たちの社会において、新自由主義は心象風景にまで深く浸透しているのではないのでしょうか？（他者を犠牲にしても、あるいは、他者への尊重・配慮なく）自己利益のみを追求する経済合理的近代人の側面ばかりが大きくなってしまっていないだろうか？こうした反省を、このデータは私たちに促しているよう

にも思います。「情報ネットワーク社会」としての 21 世紀日本社会、産業社会をどう構想するのか？非力ながらも、問い続け、自分なりの展望を切り拓いていきたいと考えております。

なお、個別のコメントなどをいただいても、お返事などしかねる場合が多いので、その点、予めご了承くださいと存じます。

<関心をもたれることとなったデータ>

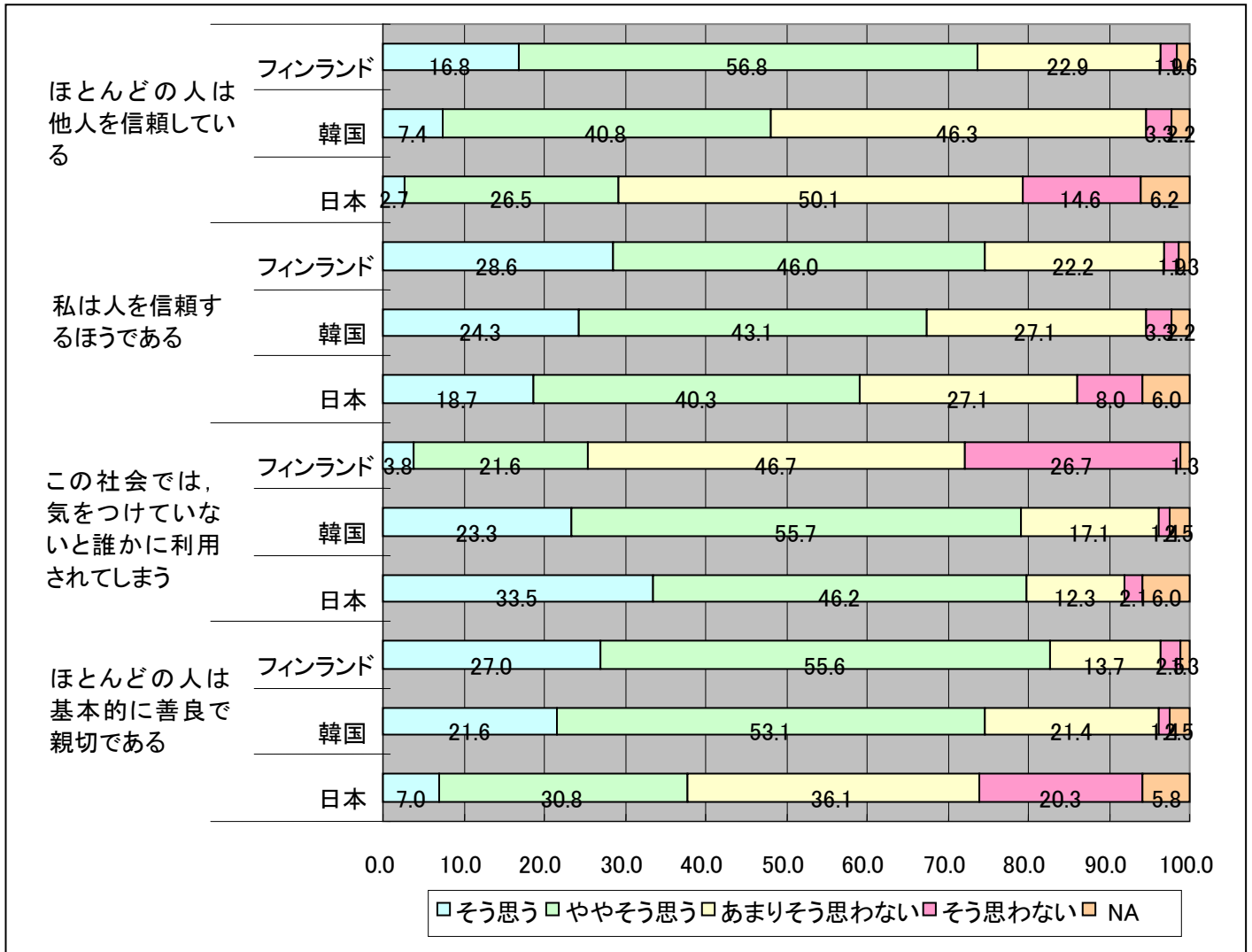


図 1 対人信頼感の比較 (JFK 大学生比較調査)

言及される際には、「木村忠正 2005 『間メディア性』本格化の年』、『NIRA 政策研究』第 18 巻第 12 号 (2005 年 12 月)、28-32 ページ」(上記図は、31 ページ) と記載いただければ幸いです。

<調査概要>

日本と韓国は、2002年12月上旬、東京、ソウルそれぞれにある私立大学（東京：早稲田大学政経、商、文学部、ソウル：高麗大学文系学部）の学生に対して実施。調査票は授業中に配布し、その場であるいは翌週に回収。調査主体は、東京大学社会情報研究所・橋元良明研究室。平成13年度～平成15年度文部省科学研究費補助金・基盤研究(B)「インターネット利用による情報格差、対人希薄化の研究」（研究代表者：東京大学社会情報研究所、橋元良明教授）による。フィンランドはほぼ1年後の2003年10月に収集。ヘルシンキ大学の学生（文系学部）が対象となり、配布・回収方法は日本・韓国と同じである。

回答者は東京487人、ソウル490人、ヘルシンキ315人。回答者の平均年齢は、東京19.7歳、ソウル22.7歳、ヘルシンキ23.7歳、年齢の分布は下図のとおり。

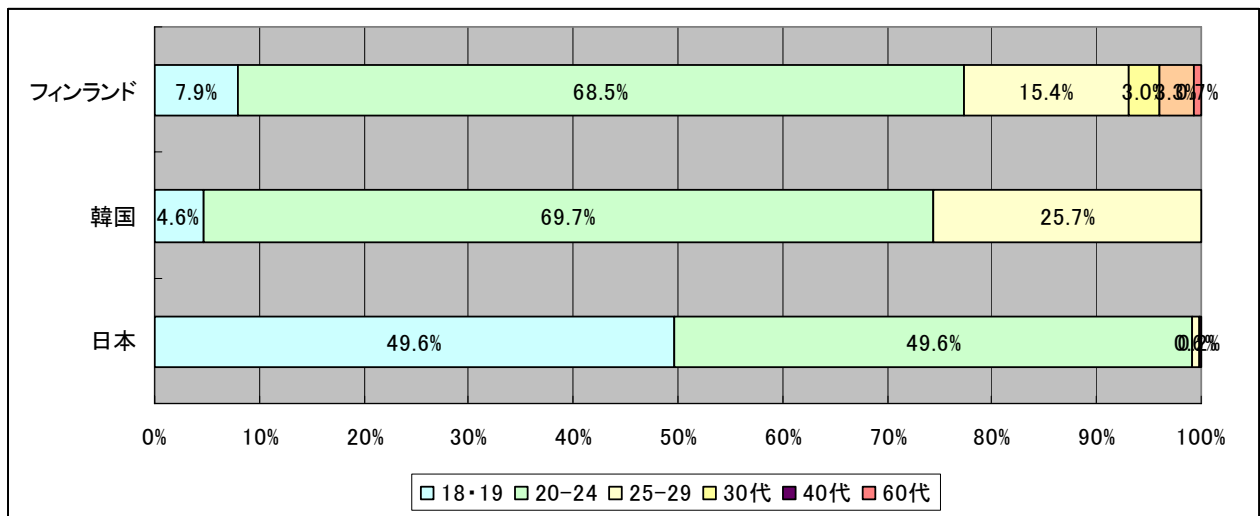


図 2 JFK 調査サンプルの年齢分布

ここで、日本のサンプルは18、19歳が半数近いことを気にされる方もいるとおもう。そこで、10代と20以上とにサンプルを分けて、信頼感に関する4つの質問の回答分布を求めてみた。

図3がその結果だが、信頼感は10代の方がやや高いように思えるが統計的に有意とはいえない。

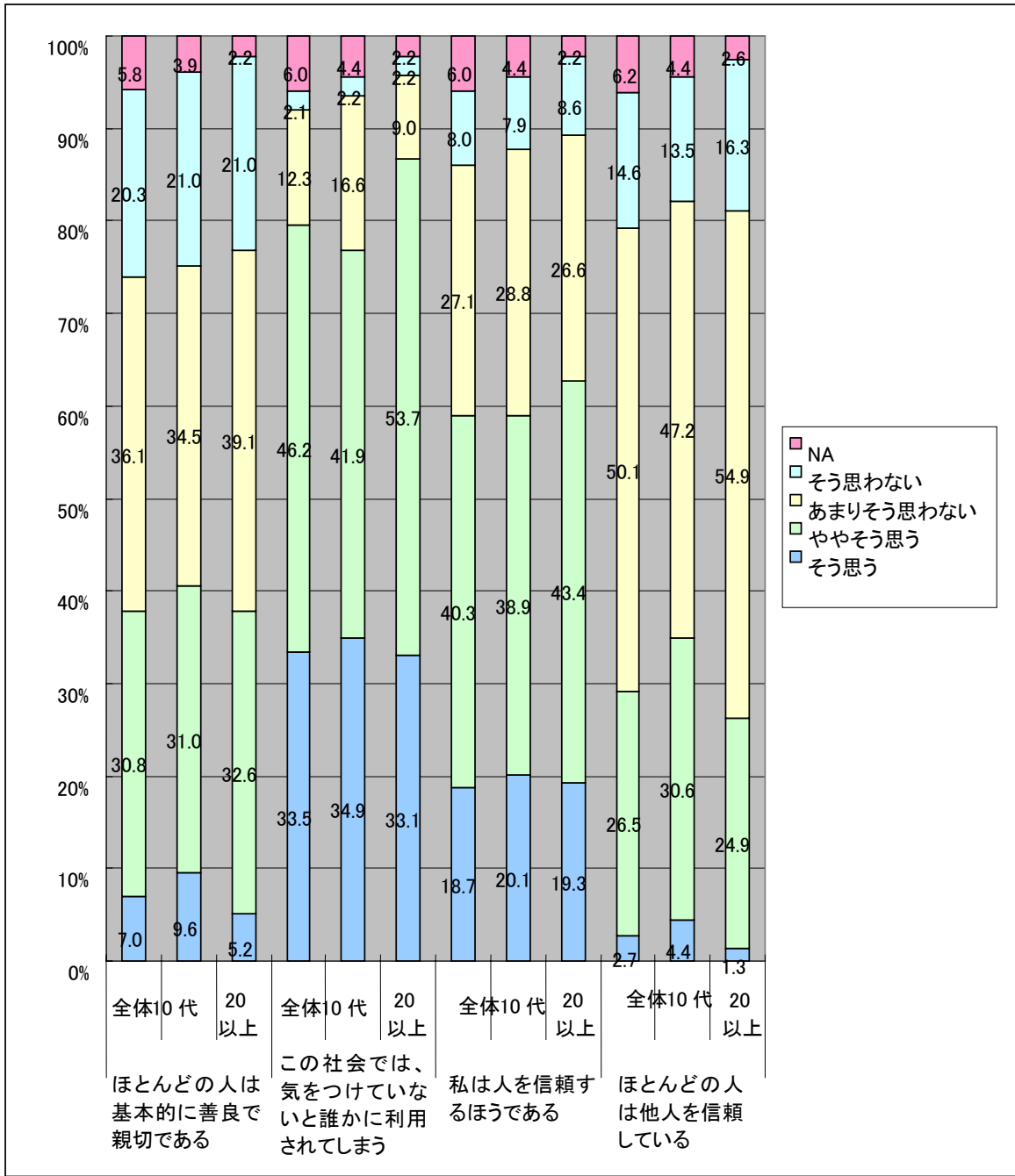


図 3 東京のサンプルについて、10代、20以上での回答分布

<質問文>

質問文は、日本語をもとに、ハングルについては、日本に留学し、3年以上滞日歴がある韓国人大学院生が翻訳、フィンランドについては、以下にある英語にもとづき、英語に堪能なフィンランド人（小職の研究上の友人）がフィンランド語に翻訳。

日本語

- (1) ほとんどの人は基本的に善良で親切である
- (2) この社会では、気をつけていないと誰かに利用されてしまう
- (3) 私は人を信頼するほうである
- (4) ほとんどの人は他人を信頼している

ハングル

- (1) 대부분의 사람은 기본적으로는 착하고 친절하다
- (2) 이 사회에서는 조심하지 않으면 남에게 이용당하고 만다
- (3) 나는 사람을 잘 믿는 편이다
- (4) 대부분의 사람들은 다른 사람을 신뢰하고 있다

フィンランド語

- (1) Suurin osa ihmisistä on pohjimmiltaan hyviä ja he pyrkivät parempaan.
- (2) Varaudun aina siihen, että muut yrittävät käyttää minua hyväkseen.
- (3) Olen aika lailla luottavainen ihmisten suhteen.
- (4) Suurin osa ihmisistä luottaa toisiinsa.

フィンランド語の元となった英語

- (1) Most people are basically good-natured and kind.
- (2) I should be always alert to the risk of being taken advantage of by others.
- (3) I am rather trustful of people.
- (4) Most people trust each other.

<補足：インターネットの利用目的>

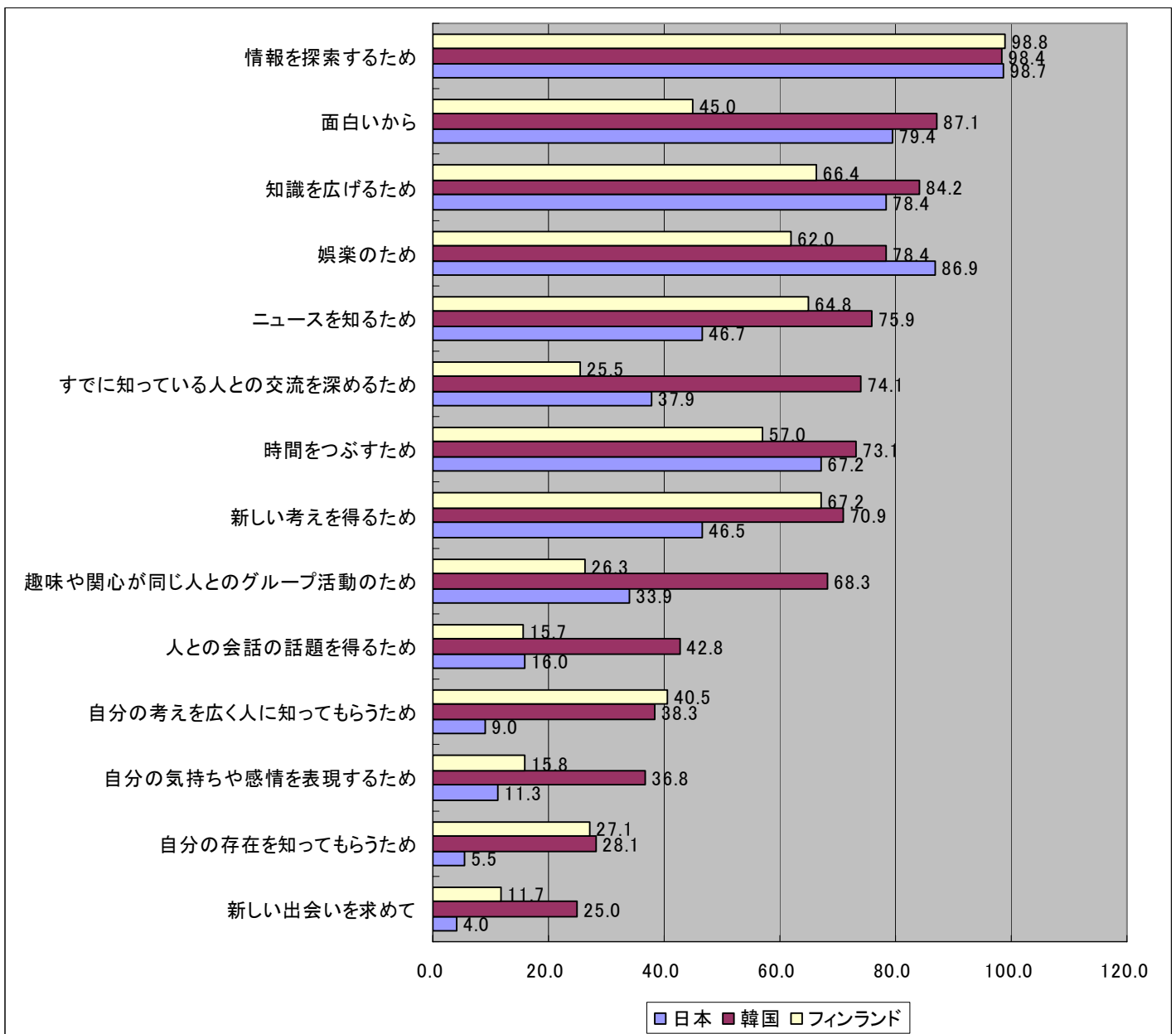


図 インターネットの利用目的（日本・韓国・フィンランド学生比較調査）

これまで小職がたずさわってきた調査にもとづく、日本社会において、インターネット、サイバースペースは、匿名性に支配された空間であり、あまり積極的に関わろうとしない社会心理的態度が顕著にみられる。そして、現実社会での社会的ネットワークとインターネットにおける社会的ネットワークとの重なりが少なく、それぞれが独立した活動空間を構成している。インターネットを利用する効用として、①情報収集、②噂話を知る、③ストレス発散、④自分を多くの人に知ってもらう（表現し理解してもらう）、⑤付き合い、知り合いを広げる、という5つの因子が区別されているのだが、日本社会を他の社会と比較調査すると、日本社会にとってのインターネットは、匿名空間であり、情報収集や覗き見こそすれ、社会的ネットワークを広げたり、自分を表現、知ってもらう手段ではないことが明確に示されている。